

特別寄稿

回顧

高角三軒家の —記録されなかつた災害—と小史

内田 勝一
(高角町)

私の家は、三滝川神前橋の下流、七百メートル堤防から、百五十メートルほど北へ隔てた所で、四方は田であつた。四軒だけの集落で三軒家さんげんやと呼ばれていた（現在でも）。四日市の空襲で、三軒家縁故の人たちが家を建て、昭和三十六年頃は六軒であつた。

この三軒家の歴史は古く、元禄三年（一六九〇）の古図には三軒が表示されているから、それ以上昔より住居していたと思われる。

昭和三十年頃に耕地整理が行われるまでは、大雨になると周囲は水浸し、川の畔に植えられた柳の木が見えるだけで、私たちはズボンを捲し上げて水の中を登下校した。稻の苗の上を泳ぎ回つたこともあつた。

父は豊臣秀吉が毛利の高松城を水攻めにしたことを引用して「高松城の水攻めや。」と言つていた。

大正年間に現在の神前橋付近が決壊した時は、床まで水が上がり下駄が浮いていたといい、納屋の壁には下の方が水に流れ桟竹さんつり（壁の芯として竹を縄で編んだもの）だけになつた跡があつた。

その時は北一百メートル程の曾井の清水から水やにぎり飯が三軒家へ舟で運ばれたと叔父や古老に聞いている。又、この集落のすぐ西には小高い土手道があり、先人たちが水を

防ぐために年一回川原から砂を運び築いた土手道であったが、近年の農機具の大型化や工事のためのダンプカー等に踏み下げられて一見しただけでは判らないけれど私の知る限りではこの土手を水が越えたことはない。

又、三軒家の前の三滝川左岸の堤防には、二十四本の松並木があり、大風が吹く時はゴウゴウと鳴る松風の音が家まで聞こえて来た。先人たちが集落を守るために植えたものである。この松の大木も昭和二十年に松根油(ぱうこんゆ)を取るとか敵飛行機の目標になるとかで全部が伐り倒され、長い間堤防上に放置されていた。

二十四本の松並木の中でも西端から五本目と六本目の松が特に大きく、切り口五尺八寸（一・七メートル）長さ十一間二尺（二〇・四メートル）である。

河川敷内に四名が所有する土地が三反三畝(さんたんさんせき)あり、四軒で場所を決め竹を刈つて薪にしていた。

その籠の中に高さ十五メートル位だったと思うが根元が卵型した木があり、東隣の加藤清郎さんが富田中学の生物の先生に調べて頂いたら珍しい「いぬなし」の木と判つて三軒家人たちは大切にしていた。

昭和十五年頃、松並木の南側の川べりに蛇籠(じらう)と言つ鉄線で編んだ網状の筒の中に大きな

石を入れた長さ七、八メートル位の枕状のものが百メートル程並べられ、三軒家の人たちは蛇籠の石の間に柳の枝を差して根を張らせて水流を少しでも防げりとしたのであり、柳の木を抜くと叱られると聞いた。

その頃の三滝川は記念橋

—昭和十五年に架橋され、紀元二千六百年をとじて記念橋と命名されたが、この架橋に尽力された当時の県会議員の名を取り、私たちは川村橋とも呼んでいた。それに付随して曾井町の眞教寺から川原堤防へ至る道も整備され、曾井の新道しんみちと親たちは言っていた。そして左岸に桜の木を二十本程曾井の人たちが植えた—

の下あたりには大きな石があちこちにあり、そこにホオジロや川鳥が卵を産んで抱いていたのが散見された。

流れも急なところもあり、流れが突き当たつたところは深く青かつた。鮎・キス・鰻・ムツ等が沢山いた。そんな川も大雨となると川の面が濁流となり、ゴロゴロと川底の石がぶつかり合う音が響いた。

昭和三十六年六月二十七日の朝、昨日からの大雨で川原から「ゴロゴロ鳴る音が夜通し不気味に聞こえていた。夜が明けるのを待つて隣の人と川原を見に行こうと家を出た。する

と、田の至る所から土と水が吹き上がりついて特に田に掘った灌漑用の井戸からは二メートル程の水柱が上がっている。地下水が砂で川原と連なつている為である。堤防に上ると、堤防の下の女竹(おなご�)の籜を押し伏せて濁流が波打ちながら轟音を響かせ大きな木が水中を転び

ながら流れていく自然の猛威を果然として見ていた。

「切らかすかわからんない。」と二人とも危機感を感じた。区長（自治会長）や総代さんも見廻りに来て「これは切らかす、ほら貝を吹こ。」と急いで引き返され、ほら貝が鳴り響いて高角に非常呼集がかかり、高角の東の端まで三々五々駆け付けて集まつた人たち



水田に映る三軒家の桜

は前述の記念桜の枝を切つて堤防に当たる水流を和らげようと努力したが、繩が切れたり杭もろとも流されたり手の出しそうがなかつた。そのうちに堤防が水を含んで泥田のように足が沈むようになつた。正午頃、突然堤防が蛇のようになりねうねと蛇行し始めたと見えた時、一気に濁流が田の方へ流れ込んだ。初めは三、四十メートル程であつたが、次々と砂だけの堤防は水に削り取られて七、八十メートルくらいになつた。

川の中に造つた砂の堤防と言つた感じで堤防が水に浮かんで下から切れたと言える状況であった。この時三軒家共有の土地もいぬなしの木も山の神の田も全て流出し、後日、県と抹消の立会いをした。この災害の原因は昭和三十五年当時、尾平町へ四日市商業高校を建設するに当たり残土を対岸の小生の町の河川敷きの畠や籬に盛り上げ川幅が狭くなつた所へ濁流が当たり反動で水流が左岸を直撃したためであつた。

当時の区長さんは総代さんや私たちを連れて地方事務所や地元選出の県会議員に窮状を訴えて尽力して頂いた。

現在の左岸は護岸工事もされ河床の砂も取つて低くなり、あとなしい砂の川になつている。前述の土地の権利書や松の木の大きさは県の受取書に書かれ、長い間組長箱に入つていた。

この災害は四日市市の記録には昭和三十六年（一九六一）前線豪雨と記録されているが、市内周辺の水害が大きかつた為に図書館にも県土木にも記録はない。当時の新聞を図書館で見せて頂いた。その記事によると「前日の六月二十五日までは干天続きで田植えが危ぶまれた」とある。

この堤防の決壊による人家への被害は幸い無く、木戸（玄関）先まで水が迫つただけであつたが、田の方は五町歩程に砂が入り手作業で除去するのに皆苦労した。

この様に高角町の先人たちは菅原町から尾平町まで五・五〇メートルの堤防を必死の思いで見守つてきたのである。

—編集後記—

本冊子は、平成十七年八月に発行されました冊子「ふるむと神前」の続編に等しく、前冊子で十分にご紹介できなかつた郷土の姿を私たちの世代が後世に残すことのできる遺産の一つだと信じて、前冊子に引き続き、よりおもしろく、つづアルに作成して地域の皆さんに楽しんで読んでいただきたいといつ熱い思いから、冊子作成に取り組むことにいたしました。

編集者は、「ふるむと神前」の編集委員の中より、執筆者四名、写真担当者一名、地域マネージャー一名の構成で、昨年の秋頃より本誌の作成にあたりました。

まず、編集にあたり、タイトルと内容について協議をいたし、冊子の題名を「かんざき風物詩」と称し、「神前地区社会福祉協議会広報部」が毎年三回、各町に配布いたしてあります「社協だより」の中の風物詩をまとめた冊子として発行するに話が決まり、次の六項目に分けて編集を行つことにいたしました。

編集内容を一部・季節の風景、一部・行事・まつり、三部・生活・風習、四部・ものがたり、五部・伝説・芸能、六部・史跡・古墳の分野に柱立てし、言語・表現・語りなどに

工夫をこらして、郷土で使われている言葉をそのまま生かし、紙面に取り入れるなどして編集にあたりました。

一方、編集を重ねる中で、資料作りやパソコンを使っての原稿の整理や何度も原稿の推敲が行われるたびに、文章の打ち直しを行つていただき、大量の原稿の処理に大変なご苦労をおかけした地域マネージャーの方に深く感謝の意を表します。

こうして、秋・冬・春・夏の四季節をかけて発行の運びとなつた本冊子ですが、不慣れな編集者によるもので、記述・文章表現の中にご不明な点が多くあるうかと思われます。が、ご容赦いただいて、この冊子が家庭の中で、大人からお子様まで楽しく読まれ、永く語り継がれて行くことを願つてやみません。

最後になりましたが、冊子発行に際して、特別寄稿をいたしました内田勝一様をはじめ、挿絵・題字・文章指導にご協力いただきました方々に心より感謝とお礼を申し上げます。

平成二十四年八月

編集委員 大戸 美千代

凡例

協題挿
力者字絵
編集委員

岡野田酒中森加石川
中ゆ井川寺藤川
宗介ゆかり則里紀武雅子
介

門坂大戸美千代
馬倉
和弘馨

かんざき風物詩

発行	2012年8月31日
編集・発行	かんざき風物詩編集委員会
協賛	神前地区地域社会づくり推進委員会 神前地区社会福祉協議会 広報部
連絡先	神前団体事務局 〒512-0923 三重県四日市市高角町2977番地 ■059-327-1501
印刷	フコク印刷工業有限会社 三重県四日市市東日野2-8-1 ■059-322-2022

